

令和 5 年 6 月 27 日現在

機関番号：32524

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K14425

研究課題名（和文）SWAP-200によるパーソナリティ障害査定過程の日米比較研究

研究課題名（英文）A Comparative Study of the Process of the Assessment of Personality Disorders with the SWAP-200 between Japan and the USA

研究代表者

鳥越 淳一（Torigoe, Junichi）

開智国際大学・国際教養学部・教授

研究者番号：90635880

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は米国で開発されたShedler-Westen Assessment Procedures-200（以下SWAP-200）の日本語版を活用し、パーソナリティ障害の評価過程において日米でどのような差が存在するかを比較検討することを目的とした。パーソナリティ障害は属する文化からの逸脱が焦点となるが、各文化によってそのベースラインは異なっている。今回の研究では、DSM（APA）に準拠しながらも、類型的評価ではなく、200項目のパーソナリティ特性に対する臨床家の観察を基準に次元的评价が行えるSWAP-200を使用し、日米の臨床家がそれぞれの診断カテゴリーをどのように評価しているかを検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

パーソナリティ障害の評価には、『DSM-5精神疾患の診断・統計マニュアル』（APA）に表記されているように、被評価者の人種的、文化的、社会的背景を考慮に入れる必要がある。しかし、DSMそのものが米国で作成されているため、日本人臨床家が日本で日本人を対象にそのパーソナリティ機能を評価する場合、何を考慮すべきかの指針が必要になる。今回の研究では、依存性の捉え方が日米では大きく異なっているため、他者の依存に対する許容、他者への期待と自身の責任の持ち方など対人関係の中での「依存」の機能を考慮した日本における評価基準の必要性が示唆された。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study was to compare the differences that exist between the USA and Japan in the assessment of personality disorders using the Japanese version of the Shedler-Westen Assessment Procedures-200 (SWAP-200) developed in the USA. Personality disorders focus on deviance from one's own culture, but each culture has its own baseline. The current study used the SWAP-200, which is based on the DSM (APA) but provides a dimensional assessment based on clinician observations of 200 personality traits rather than a typological assessment, to examine how clinicians in Japan and the US rate each diagnostic category.

研究分野：臨床心理学

キーワード：パーソナリティ障害 パーソナリティ機能 依存性

1. 研究開始当初の背景

パーソナリティ障害の診断には、米国精神医学会が刊行している DSM (精神疾患の診断と統計マニュアル) 及び世界保健機構が刊行している ICD によるところが大きい。どちらも長い間、10 項目ほどの診断基準を満たすか・満たさないかを判断し、項目を満たす数によって障害か否かを診断するという加算方式による類型的評価を行ってきた。しかし、この方法にはさまざまな問題が指摘されてきた (たとえば、弁別的・収束的妥当性に乏しい、統計的な処理に耐えられないなど)。また、臨床の現場において、パーソナリティ障害の診断にあたっては評価者の観察が主であり、パーソナリティ特性に直接関連する質問への回答を求めることは、うつ病や統合失調症などの診断と異なりなじまないことも指摘されてきた。このような問題点を解決するため、Westen と Shedler (1999ab) は DSM に準拠しながらも臨床家の専門的観察を診断の根拠とし、可能な限り、障害の重複を回避できる Q ソート法による診断システム SWAP-200 を開発した。研究代表者は、SWAP-200 の日本語版を作成したが (鳥越・土岐 2021)、本アセスメントツールは、米国で、米国の臨床家による米国で生活をする患者を対象に得られたデータに基づいて作成されたものである。SWAP-200 は欧米を始め 13 か国で翻訳版が作成されているが (調査開始時)、基本、項目の変更は認められておらず (一部文化に馴染まない単語や表現は修正可能)、観察し採点したものは Shedler たちの研究チームが作成したソフトウェアを使用するため、基本、米国のデータに照らし合わせて診断がなされるという仕組みになっている。パーソナリティ障害は DSM などを通して広く世界に広がった概念でもあるため、理解の準拠枠が共通しているという考え方もあるかと思われるが、本ツールの診断にはプロトタイプマッチング法が採用されており、原版 SWAP-200 の作成時のデータが各障害の原型 (プロトタイプ) となり、それにどれくらい類似しているかが重要となる。そのため、日米の臨床家のパーソナリティ障害に対する理解の比較検討は本ツールの現場での有効性を確認するためには必要と考えられた。

2. 研究の目的

そこで本研究では、日米の臨床家のパーソナリティ障害の理解の違いを検討することを目的とした。SWAP-200 の日本語版作成時に、多くのパーソナリティ障害において、SWAP-200 のアセスメント結果と臨床家の直感的診断には中程度の正の相関が確認できた。また関連しない、ないし、負の相関が想定されるものに関しては、無相関ないし負の相関が確認され、翻訳版を作成した海外の研究と同程度の結果となった。しかし、依存性パーソナリティ障害においては、SWAP-200 の評価と臨床家/評価者の直感的な観察とは相関が無く、日本における依存性パーソナリティ障害は SWAP-200 では評価できない、あるいは評価しにくい可能性が示唆された。そこで本研究では主に依存性パーソナリティ障害に焦点を当て日米の捉え方の比較を行った。

3. 研究の方法

本研究では、2021 年に実施した以下の調査研究を基に SWAP-200 で「依存性パーソナリティ障害」だと評価されている内容を分析し、日本人臨床家が依存性パーソナリティ障害と評価する際にどのような特性を重視しているかを明確にし、原版 SWAP-200 のそれと比較を行った (鳥越 2022)。

臨床家 100 名（職種：医師 54 名，臨床心理士 46 名，臨床経験 12.6±4.5 年，性別：男性 28 名，女性 72 名）を対象に日本語版 SWAP-200 と Shedler らが作成した DSM-IV II 軸に挙げられているパーソナリティ障害の基準 A に相当する表記に対して 5 件法（1. 患者のパーソナリティはこの障害とは共通点がない，2. 患者はこの障害の特性を少しばかり有している，3. 患者はこの障害の顕著な特徴を有している，4. この障害を有している，5. この障害を典型的に示している）で回答を求める II 軸プロトタイプ評価で患者／クライアントを評価してもらった。臨床現場（複数回答あり）は教育領域 6 名，医療現場 97 名，司法領域 3 名，開業 1 名で理論的背景（複数回答あり）は，認知行動 3 名，精神力動 57 名，人間性心理学 2 名，集団療法 1 名，その他（複合的や薬物療法など）が 40 名であった。被査定者 100 名（男性 35 名，女性 65 名）が有する PD ないし傾向の内訳（複数回答あり）は，妄想性 8 名，スキゾイド 12 名，統合失調症型 6 名，反社会性 1 名，境界性 16 名，演技性 11 名，自己愛性 8 名，回避性 37 名，依存性 19 名，強迫性 11 名，その他 17 名であった。収集したデータは統計ソフト SPSS(version 22 for Windows)を用い，スピアマンの順位相関係数を求めた。

4. 研究成果

研究者らの調査研究（鳥越・土岐 2021）では，日本人臨床家の「依存性パーソナリティ障害」の評価は，SWAP-200 における依存性パーソナリティ障害（すなわち，米国人臨床家の評価）とは無相関であることがわかった($r=.07$)。SWAP-200 では，評価者は，DSM の評価とは異なり，先に診断カテゴリーを認識した上で対象者を評価するのではなく，どの障害に関連するかはわからない状態で，200 項目のパーソナリティ特性を対象者に「最も当てはまる」ものから，「全く当てはまらない」ものへと分類していく。この意味において，SWAP-200 の評価方法は，診断名先にありきではなく，観察からボトムアップ的に診断を導くものと言える。

原版 SWAP-200 においては，依存性パーソナリティ障害に寄与する特性は，「過度に情緒的な支援を求める，あるいは依存する傾向がある。過剰な保証または承認を必要とする」「ご機嫌を取るような，あるいは，従順的な傾向がある（例えば，支援や承認を得ることを期待して，自分が同意していないことや，したくないことを承諾するかもしれない）」「情緒的に重要な人たちから拒絶される，あるいは捨てられると恐れる傾向がある」「一人になることを怖れているようである。一人になることを避けるために大抵のことはするかもしれない」「消極的で非主張的な傾向がある」など DSM の依存性パーソナリティ障害の診断基準に記載されている項目に近いものが上位を占める。

これに対して日本人臨床家が依存性パーソナリティ障害には「不安になりがちである」，「気だるさや疲れを感じたり，活力に欠けたりしがちである」，「不幸や憂うつだ感じたり，意気消沈したりする傾向がある」，「ストレスや葛藤に反応して心身症的症状を発症する傾向がある（例えば，頭痛，腰痛，腹痛，ぜんそくなど）」，「さまざまな社会的状況において恥ずかしがる，あるいは控えめになりがちである」，「自己を責める，あるいは，悪いことが起きると責任を感じる傾向がある」，「自分は十分ではない，劣っている，あるいは失敗者であると感じる傾向がある」，「苦悩しているとき自分自身をなだめたり慰めたりすることができない。情動の調整を手助けしてもらうために別の人の関わりを必要とする」，「決定を下すのが困難である。選択に直面すると優柔不断になる，あるいは二の足を踏み身動きがとれ

なくなる傾向がある」といった項目が寄与していると捉えてえた。SWAP-200 に使用されている 200 項目の特性は関連性の強弱はあるが、複数の障害にわたって寄与している。しかし、今回日本人臨床家が依存性パーソナリティ障害と評価した上記特性は比較的、回避性パーソナリティ障害やスキゾイドパーソナリティ障害に多くみられる特性であり、依存性パーソナリティ障害の特性と想定された項目がないわけではないが、寄与度は低いものであった。そのような状況から、日本人臨床家の考える依存性パーソナリティ障害は、米国におけるスキゾイドパーソナリティ障害と弱い相関 ($r=.21$) が、回避性とは中程度の相関 ($r=.45$) が認められている結果となっている。

このような違いが生じる可能性を考えるにあたり、牛島 (2012) のサイクロイド・パーソナリティ障害と土居 (2007) の「甘え」の構造は参考になる。サイクロイド・パーソナリティ障害はクレッチマーが論じる気分障害の病前性格に基づいているが、DSM の診断システムにはない類型である。牛島によると、サイクロイド・パーソナリティの基本的特徴は社交性であり、口唇サディズム期に由来する一体化願望がパーソナリティに組み込まれているという。また、このパーソナリティ構造を有する人は無力感、抑うつ、見捨てられ不安、怒りを体験しやすく、他者とのつながりが喪失すると心が折れてしまい無力なってしまう、場合によっては、その無力感を基盤に激しい怒りが爆発する。そのため、サイクロイド・パーソナリティを有する人は、他者と一緒にいると元気が出るが、対象がいなくなると気弱になるという問題を抱えており、それを克服するために悪い自分は先々見捨てられないように一生懸命人のため、ひいては社会のために尽くす人間であらねばならないという心的心構えを作り出す傾向がある。このようなパーソナリティの特徴は、非社交性を特徴とする回避性やスキゾイドとは対照的であり、牛島 (2012) はサイクロイドの心性が DSM における依存性パーソナリティ障害の中核にはあるのではないかと論じている。他者に対して接近するか/社交的か、回避するか/非社交的かで区別されるのであれば、依存性パーソナリティと回避性パーソナリティは弁別可能であり、実際、SWAP-200 の依存性パーソナリティ障害に寄与する特性項目は、サイクロイド心性を反映するような記述となっている。

しかし、日本における依存の捉え方は、土居 (2007) が提唱した日本人特有の「甘え」の構造に見られるように欧米とは異なると考えられる。土居 (2007) は甘えを「愛されたい、大切にされたいという人間の欲求であり、他人の善意をあてにしてそれによりかかるとのできる特権である」と定義し、乳児が自分と母親が別の存在であることを知覚した後に、その母子分離の事実を心理的に否定し、分離の痛みを止揚しながら母子の一体感を育むように働くと指摘している。土居はこの心理が日本の文化のあらゆるところに見て取れ、日本人にとっては極めて自我親和的感情であり、甘えられる関係性が精神生活の健康を維持する土壌になっていることを論じている。また土居 (2007) の観察によれば、日本人は、直接、甘えさせてほしいという願望を言語化はしないが、相手の気持ちに配慮することによって相手から配慮を引き出そうとする返報性の原理が働いたコミュニケーションを幼少期早期から (言語的というよりも、非言語的に) 学習しているという。一方、米国では依存は非自立性を意味し、病理的な意味合いが強くなる。Gabbard (2014) は依存という言葉が米国で軽蔑的に使われると言及したうえで、米国文化でも「自分を支えて自己評価を保つために、承認、共感、妥当性の確認、賞賛のようなさまざまな自己対象機能を必要とする」(奥寺崇・権成鉉・白波瀬丈一郎・池田暁史監訳 p.495) として映し返す他者の必要性から「依存」への理解を示しているが、これは日本における依存とは意味合いが大きく異なっている。

すなわち、米国 (DSM や SWAP) で想定されている依存性パーソナリティ障害の人は、

称賛して欲しい、支えてほしいと自ら近づいていくため、評価者は対照的に離れたいくなるという心の動きがこのパーソナリティ障害を直感的に理解する上で重要になってくると考えられる。それに対して、日本では、相手に配慮し、場合によってはあえて自ら距離をとることで（一人になることで）相手から憐憫の情を誘うという方略をとるため、評価者から寄っていきたくなくなるという心の動きが依存性パーソナリティ障害を直感的に理解するうえで重要になってくると考えられる。「母子分離の事実を否定し、分離の痛みを止揚しながら母子の一体感を育む」ということが日本文化に特有に作り出されるものであれば、一体感を自らあえて崩すことで、相手にその一体感を再構築させるように促すという投影同一化を介在する相互作用の記述が、DSM や SWAP に存在しなくても当然のことかもしれない。加えて、被評価者が自らの不幸や憂うつ、身体的症状を強調する目的が、相手からの配慮を引き出す甘え／依存の作用であることが考慮されなければ、これらの表現は異なる評価と結びつき、研究者らの調査研究で出てきたような依存性パーソナリティ障害のつもりで採点したにもかかわらず、別の障害（今回は回避性パーソナリティ障害）と評価されてしまうということが生じるかもしれない。

パーソナリティ障害は被評価者が属する文化の影響を考慮する必要があるため、今後、この相互作用の動きがパーソナリティ機能の一考察基準として有効かどうか実証的研究による解明が期待される。

文献

- Gabbard, G. (2014). *Psychodynamic Psychiatry in Clinical Practice*, Fifth ed. Washington DC: American Psychiatric Press (奥寺崇・権成鉉・白波瀬丈一郎・池田暁史監訳：精神利機動的精神医学 その臨床実践第5版 DSM-5 基準. 2019)
- 土居健郎 (2007). 「甘え」の構造. 増補普及版. 東京. 弘文堂.
- 鳥越淳一・土岐茂 (2021). 日本語版 Shedler-Westen Assessment Procedure-200 の作成：パーソナリティ障害の力動的な理解と研究に向けて. 『精神分析研究』. 65(1). 68-80.
- 鳥越淳一 (2022). 依存性パーソナリティ障害の査定過程における日米文化差に関する一考察. 開智国際大学紀要 第21巻2号, 149-160.
- 牛島定信 (2012). 『パーソナリティ障害とは何か』. 東京. 講談社現代新書
- Westen, D. & Shedler, J. (1999a). Revising and assessing axis II, Part 1: developing a clinically and empirically valid assessment method. *American Journal of Psychiatry*, 156:258-272
- Westen, D. & Shedler, J. (1999b). Revising and assessing axis II, Part 2: toward an empirically based and clinically useful classification of personality disorders. *American Journal of Psychiatry*, 156:273-285

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 鳥越淳一	4. 巻 第21号2巻
2. 論文標題 依存性パーソナリティ障害の査定過程における 日米文化差に関する一考察	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 開智国際大学紀要	6. 最初と最後の頁 149-160
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24581/kaiichi.21.2_149	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 鳥越淳一・土岐茂	4. 巻 45巻
2. 論文標題 難治性うつ病とパーソナリティ障害の多重構造に関する探索的検討	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日精診ジャーナル	6. 最初と最後の頁 21～25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 鳥越 淳一	4. 巻 19
2. 論文標題 米国における転移焦点化精神療法の実践・研究動向と日本での実践可能性の検討	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 開智国際大学紀要	6. 最初と最後の頁 99～110
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24581/kaiichi.19.0_99	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 鳥越 淳一	4. 巻 19
2. 論文標題 拒絶感受性に関する海外の研究動向と今後の日本における研究展望	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 開智国際大学紀要	6. 最初と最後の頁 111～120
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24581/kaiichi.19.0_111	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 鳥越淳一・土岐茂
2. 発表標題 うつ病におけるパーソナリティ障害合併の調査検討
3. 学会等名 日本精神神経科診療所協会第25回学術研究会埼玉大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鳥越淳一・土岐茂
2. 発表標題 力動的パーソナリティ査定ツールSWAP-200日本語版の基礎的検討とうつ病患者に用いた応用的検討
3. 学会等名 日本精神分析学会第65回大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------